

## 新渡戸稲造のキリスト教人格論とその実践

—21 世紀日本の教育への指針—

湊 晶子

### 序

明治政府が近代国家と社会を建設するために、教育の果たす役割を早くから認識し、全国民に普通教育制度を普及すべく努力したことは日本の教育史上特筆すべきことである。しかし今日のようにすべての人への義務教育制度ではなく、1874(明治7)年に提出された官公、私立の統計によると、当時設立された32の中学で男子生徒3,125人に対して女子生徒は28人という状況であった。

しかし明治9年には女子生徒の数が飛躍的に伸び1,112名に、同12年には実に2,747名に増加したのである。これは明治初年来日した宣教師たちにより、キリスト教人格論にもとづいた教育が、私立学校を中心に推進されたことによる。特に女性の人格の確認という近代精神に基づき、長い間男性の隷属下に置かれがちであった女性に新たな息吹をあたえた。またキリスト教人格論は、国家主義的、唯物主義的・破壊的思想の下にあった男子青年たちへも大きな影響を与えた。

近代日本形成期に日本の近代化に影響を与えた人物は数多く取り扱われているが、戦争と紛争の続く現代世界に、また心の教育が求められる現代日本に、いま最も求められる人物は新渡戸稲造の様な人物であると思う。新渡戸稲造についての研究は多方面からなされているが、「新渡戸のキリスト教に立脚した

人格論とその実践』についてまとめたものは少ない。明治・大正・昭和への影響を分析しつつ、21世紀の指針としたい。

## I 新渡戸稲造のキリスト教人格論

### 1. 教育者新渡戸稲造の生涯とキリスト教との接点

稲造は1862(文久2)年、日本がまだ西洋と普通の関係がなかった頃、盛岡南部藩士の家に生まれた。即ち日本の代表的階級である侍の家で、漢書、仏教、中国思想、日本文化など伝統的教育を受けた。幼少で父と死別、1871年、9歳で叔父太田時敏の養子となり上京、東京英語学校で西洋文化に初めて接した。その後1877年札幌農学校の二期生として入学、内村鑑三、宮部金吾らとともに洗礼を受けキリスト者となった。これは日本にプロテスタントが紹介された1859年からわずか18年後であったことに注目したい。

卒業後、今日の東京大学に学ぶが、「太平洋の橋」すなわち、西洋と東洋の橋となるべく、1884年東京大学を中退して、ジョンズ・ホプキンス大学に留学、1886年にはボルティモア友会員に認められ、クエーカー教徒としてフィラデルフィア友会にも知られるようになった。

1891年には、クエーカー教徒でありフィラデルフィアの名門エルキントン家のメリー・パターソン(後の萬里子夫人)と結婚した。教養高い女子教育者、平和主義者メリーとの結婚は、近代日本形成期における新渡戸の女子教育への献身的な働きに大きな影響を与えた。

結婚1ヶ月後には二人で帰国、稲造は母校・札幌農学校の教授となった。長男・遠益(トーマス)を生後数日で亡くし、失意の中で、メリーの実家から送られてきた資金で未就学児童のための遠友夜学校を設立、自ら無給で校長を務めた。稲造亡き後、メリーが二代目校長を務めたことを知る人は少ない。

稲造は激務のため体調を崩し、アメリカで静養中の1900年、『武士道』を英文で出版、帰国後は京都帝国大学教授を兼ねて台湾総督府に勤務、1906年第一高等学校校長、1908年、『実業の日本』編集顧問、1913年東京帝国大学教授に就任した。

これらの幅広い人生経験を経て、1918年56歳で東京女子大学の初代学長に就任し、女子人格教育の推進のために心を尽くした。1920年国際連盟成立とともに事務局次長に就任し、思想、文化、価値観の異なるあらゆる場面において対話の道をつくり、軍部の台頭で急速に軍国主義化し、平和主義からも民主主義からも離れて行った日本のために尽力した。日本からも、アメリカからも孤立して行く中で、1933年カナダのバンフで開催された太平洋会議に日本代表委員として出席した後、ビクトリアで72年の生涯を閉じた。1877年の受洗から実に56年の長きに亘りキリスト者として人格教育に当たった。

### 2. 新渡戸稲造の「人格」とキリスト教

新渡戸は、人格をPersonalityと表現した。『西洋の事情と思想』の中で「人格の意義」について次の様に述べている。「西洋人は、パーソナリティを重んずる。パーソン即ち人格である。日本では人格といふ言葉は極めて新しい。私等が書生の時分には、人格といふ言葉はなかつた。パーソンといふ字はたゞ『人』と訳してゐた。しかし仔細に調べると、メンといふ意味とは違って『人たる』といふ字である。格といつても資格といふやうな意味は毛頭持たない。人工的な、或は社会が拵へ上げる資格などは、まったく違ふ意味である。孟子が度々いつた『人は人たり我は我たり』の意味を持つその人格である。ところが日本では、この人格といふ意味がよくわからない。私の知つてゐる人で、新しい頭を持つた学士が、田舎へ引込んで村の改良を企らうとした。然るに、その周囲の人々は、『お前さんも大学を出て学士になつたのだから、東京でお役人にもなつたらどうだ。そして十分に人格をつけて来い。』といふ、笑話にもならない実話がある。恐らくその人が役人にもなつたら、それこそその人は持前の人格を落とすことになるであらう。さういふ例を見ても、人格といふ言葉は、言葉それ自体すら十分わかつてゐないのである」<sup>1</sup>。

新渡戸が『西洋の事情と思想』の中で取り上げたパーソンは、当時一般に理解されていた「個の概念の始まりを近代に置く見解」ではなく、「西暦紀元の

<sup>1</sup> 新渡戸稲造『西洋の事情と思想』(実業之日本社、1934年)、『新渡戸稲造全集』第6巻(教文館、1969年)収録563頁

初めから6世紀ぐらいまでの神学的見解」に置くものであった。それはキリスト教的人格論であり、聖書の時代から325年のニカヤ公会議、381年のコンスタンチノポリス公会議、451年のカルケドン会議を経て形成された三位一体論に根拠を置く人格論であった。即ち人格は三位一体の神との関係性の中に形成されるという視点である<sup>2</sup>。さらなる歴史的な分析については、坂口ふみの『「個」の誕生』を参照されたい<sup>3</sup>。

人格という言葉は英語では person、ドイツ語では Person で、ラテン語の persona に由来する。キリスト教文化の中に歴史を刻んで来た西洋においては、スリー・パーソンズ・イン・ワン、父なる神、子なるキリスト、聖霊とそれぞれ三つの persona を持つという概念が歴史の中に地下水の様に流れている。新渡戸は、「とにかく西洋では、宗教の関係上、パーソンということを頻りに説いたものであるから、一般人にもその意味がぼんやりとわかっていた。(中略) 詰り、東洋と西洋の考え方の違いは、パーソンというものに根柢して、そこから起る差が非常に多いのである。パーソンというものを深く認めればこそ、他人の権利も認めるのである」<sup>4</sup>と述べ「人たる」ことを重んじ、「人格」と「キリスト教」の接点を提示した。

新渡戸稲造のキリスト者としての信仰に関する論争はあるが、その内容についてここで論議することは避けたい。角谷晋次(盛岡大学文学部教授、宗教主任)による「新渡戸稲造のキリスト教信仰」<sup>5</sup>、佐藤全弘「新渡戸稲造の信仰」『新渡戸稲造研究』<sup>6</sup>、宮本信之助「若き新渡戸稲造の信仰」『新渡戸稲造研究』<sup>7</sup>を参照されたい。

<sup>2</sup> 湊晶子「新渡戸稲造における私と公と公共」『公共哲学 16 宗教から考える公共性』稲垣久和、金泰昌編(東京大学出版会、2006年)184～186頁

<sup>3</sup> 坂口ふみ『「個」の誕生—キリスト教教理をつくった人々』(岩波書店、1996年)

<sup>4</sup> 新渡戸稲造 前掲書 564～565頁

<sup>5</sup> 角谷晋次「新渡戸稲造のキリスト教信仰」『新渡戸研究』第2号(新渡戸稲造会、1993年)91～121頁

<sup>6</sup> 佐藤全弘「新渡戸博士は真のクリスチャンか」『新渡戸稲造—生涯と思想—』(キリスト教図書出版社、1984年)475～481頁

<sup>7</sup> 宮本信之助「若き新渡戸稲造の信仰」『新渡戸稲造研究』(春秋社、1969年)5～33頁

新渡戸は「パーソン・人たる・人格」についての総論を「神学論争」の中から引き出すのではなく、創造主との直線的な愛に満ちた関係の中に人格形成の源泉を見出そうとしたのである。彼は随所で垂直的ヴァーティカルな関係の必要性を説いた。人間は単に横の関係ホリゾンタルだけで生きるものではなく、縦の関係においても生きなければならないことを指摘した。「人間は大きな心で人と和して行かねばならない。絶対を楯に取り、理屈を一理も曲げずに、他人をことごとく小人視して、我独り澄めりという心がけでは、世の中は少しもよくなる。どれほど高い理想を抱こうとも、実行に当たっては譲れるだけ譲り、折れるだけ折れて行くのが大切である」「人はどこか動かすべからざる所、譲れぬところ、断乎犯すべからざる信念がなければならない。人を相手とせず、天を相手とする覚悟をもたなければならない。博士はこれを縦の関係 Vertical Relation と呼んだ」<sup>8</sup>。この縦の関係を結びえた人が他者との関係からでなく、自己を確立し、ぶれないで自己の方針を決め、己が革新に生きることができるというのである。ここにキリスト者としての新渡戸の強さと慰めを見るのである。

筆者は、新渡戸のキリスト教に立脚した人格形成について、次の様に要約したい。「人はどこか動じないところ、譲れぬという断固とした信念がなければならない。人格神との縦関係から生ずる対話性の中に人格は形成される」と。先に『西洋の事情と思想』の「人格の意義」の中で新渡戸が、「西洋人は、パーソナリティを重んずる。パーソン即ち人格である。日本では人格といふ言葉は極めて新しい。私等が書生の時分には、人格といふ言葉はなかった。パーソンといふ字はたゞ『人』と訳してみた」点について指摘したが、今に至っても日本において「人格」の意味が曖昧である。

### 3. クエーカーキリスト者新渡戸の人格論の原点

明治以降急速に創立されたキリスト教主義教育機関の建学の精神には、ほとんどの学校で「人格教育」を掲げる。教育基本法にも「人格」が語られる。一

<sup>8</sup> 佐藤全弘、前掲書、259頁

般にどの様に理解されているか。今こそ新渡戸の人格論を再検証する時ではなからうか。

人格を形成することこそ、人格教育と教養教育の第一の目的であることを早くから新渡戸は指摘した。1933年刊の『内観外望』に収録された「大学教育の使命」と「大学教育と職業問題」によくまとまった論述があるが、人格教育に関してはこれよりさらに早い次点(1907年)に出版された『随想録』の中で、「教育の目的」と題して取り扱っている。

『内観外望』の「大学教育の使命」の項において教育の第一目的を「人の心をリベライズ（自由）し、エマンシペイト（解放）すること」<sup>9</sup>と定義した。また、大学の存在理由について、「自分より偉い人格グレート・パーソナリティに接するといふことである」<sup>10</sup>と述べた。

すでに新渡戸は当時の日本の教育について、1906年に「我が教育の欠陥」と題して「今日の教育たるや、吾人をして器械たらしめ、吾人よりして厳正なる品性、正義を愛するの念を奪いぬ」<sup>11</sup>と主張し、あくまでも教育の目的を人格形成に置いた。

1904年2月の「性ビーイングと行ドゥイング[人格形成か行為業績か]」において、「人の行為は主として其品性を表彰するものなるが故に之を尊しとす。善人の戯は愚人のいと賢き業よりも予を教ふること多し。“to be”と云ふは、“to do”と云ふよりも遙かに重んずべきものぞ。汝、善なるべし、しからば汝の為すところ皆善なるべし」<sup>12</sup>と述べ、人間はただ一人、神と相対して立ち、その神により慰められ、強くされ、魂の平安を得て存在することが出来ると考えた。

新渡戸にとって、「宗教とは神の力が人の心に働きて、其の人に特有の働きをなさしむるものである」。「宗教とは人が神の力を受けて、之れを消化し己

の性質に同化して、己のものとして、之を他に顕はすことを言うのである」<sup>13</sup>と説明され、内村鑑三の様な厳しい人格神との神学的対話よりも、神の力が人の心に温かく働いて人を生かす力としてとらえられていた。これは新渡戸のクエーカー教徒としての信仰の故であろう。

松川成夫は「新渡戸の教育の根底にある宗教的信仰」に於いて、クエーカー信仰者としての新渡戸の信仰について次の様に説明した。「クエーカーでは信仰は神の霊的交通であることを重んじる。(中略)クエーカー信仰は一面では神秘的、多面では実践的であった。神秘的方面はこれを口にせず、実践的方面は行いをもって活発に現すものとした。新渡戸稲造の宗教も神秘的実行主義であって、信仰の教義内容については多くを語らず、其の実を實際生活に結ばせるという性質のものであった」<sup>14</sup>と。新渡戸にとって「宗教とは何ぞや」で指摘した如く、我一人では、弱き悲しき存在であるが、ただ一人神と相対して立ち、その神により慰められ、強くされることによって、魂の平安を得て立たせるものである。新渡戸は「悲しみの人」であったからこそ、激動の世にあって「寛容の人」であり得た。新渡戸は、『人生雑感』の中の『悲哀の使命』において「基督は聖書に悲しみの人と誌され、ゲーテは基督教を悲哀の宗教と称した事を観ても、如何に基督教が悲哀に重きを置き、且つ悲哀の觀念に打たれて心細く思ふ人、淋しく感ずる人、即ち悲哀の人々に偉大な慰藉を与へるかが解る」<sup>15</sup>と記している。新渡戸自身一高の校長時代に、矢内原忠雄に「新渡戸先生の宗教と内村先生の宗教とは何か違ひがありますか」と聞かれたことがあるが、「僕のは正門でない。横の門から入ったんだ。して、横の門といふのは悲しみという事である」<sup>16</sup>と答えたそうである。後に矢内原忠雄は、「新渡戸先生の宗教」の中で正門とは贖罪の信仰のことで、これは内村先生の信仰の中心であり、新

<sup>9</sup> 新渡戸稲造「大学教育の使命」『内観外望』（実業之日本社、1933年）、『新渡戸稲造全集』第6巻407～409頁

<sup>10</sup> 新渡戸稲造「大学教育と職業教育」前掲書439頁

<sup>11</sup> 新渡戸稲造「我が教育の欠陥」『随想録』（丁未出版社、1907年）、『新渡戸稲造全集』第5巻(教文館、1970年)115頁

<sup>12</sup> 新渡戸稲造「性ビーイングと行ドゥイング[人格形成か行為業績か]」前掲書22～23頁

<sup>13</sup> 新渡戸稲造「宗教とは何ぞや」『人生雑感』（警醒社書店、1915年）、『新渡戸稲造全集』第10巻(教文館、1969年)19頁

<sup>14</sup> 松川成夫「新渡戸稲造の教育思想」『東京女子大学比較文化研究所紀要』第52巻(東京女子大学比較文化研究所、1991年)62頁

<sup>15</sup> 新渡戸稲造「悲哀の使命」『人生雑感』58頁

<sup>16</sup> 矢内原忠雄「新渡戸先生の宗教」『矢内原忠雄全集』第24巻(岩波書店、1965年)